

マルセーロ・デ・リバデネイラの報告記録（第五卷の三）

佐久間 正 訳

第二十章 祝福の殉教者が十字架にかけられ槍で突かれた。

十字架の形——十字架に付けられた——聖日本人達は十字架上で説教をした——聖人たちは主を讃えながら死んだ——一背教者の改宗——信心の深さ——どの年どの日の何時に死んだか。

半三郎ハサンゾウ（この者は述べた如く、聖殉教者を磔にした役人フエヒメである）は彼等が到着し、十字架がそこに準備され（この十字架は上部に於て交叉している横木のほかに、中部に一つの木片を有しそれに腰かけ、磔になる者が両足を抜けるようにもう一本の棒がついている）、作つた穴の近くに置かれ、集まった多数のポルトガル人や日本人がすでに妨げになるのを見て、彼等（殉教者）を十字架にかけるように命じた。この「執行の」為に指定された異教徒たる多数の「手下」が直ちに聖人たちを十字架につけるため彼等（の体）を捉え、修道士からその貧しいマントを脱した。彼等（修道士）は少しも嫌悪の情を示さずに主を讃え、十字架にかけられ（枷で）打ちつけられるに委せた。先ずそれ

〔十字架〕に接吻をし、聖アンドレースの再来のように十字架に向かつて優しく聖い言葉を述べ、僅かに残された生命の時間を利用して主に御恵みを求めその霊を主に委ねた。殉教者の一人一人に獄卒が指定された。それで混乱することなく短時間の内に十字架の上に置かれ、両腕・両脚は縛り付けられ両足・両手・頸は鉄の枷で十字架に打ち付けられた。このような立派な十字架はそれまでに用いられたことも作られたこともなかった。ポルトガル人は十字架を立てられる前に、六人の修道士を日本人の中央に置き、日本人を片側に十人他の側に十人を置くように役人（フエイクス）に求めた。その「願ひ」が容れられ、殆んど同時に総ての「十字架」が立てられた。その場に居てこのような悲しい光景を見ていたキリシタンの叫び声と涙が「惹き起こされた」。多数の人々がそれに堪えられず立ち去り、地上に置かれていた聖人たちの衣類の一部を、極めて価値ある大切な品として、持ち帰ることのできるものは持ち帰った。〔十字架〕が立てられると日本人殉教者は強い精神を以って偶像崇拜の偽瞞を異教徒に説き始め、信仰の真実とそのため死ぬ喜びを彼等に示した。四人の獄卒が鋭い槍で末端の者から突き始め、各人を両側から二・三回突いた。それは心臓を貫いて槍の刃が肩に抜き出た。

この機会にイエズス会の二人のバードレ、フランチェスコ・パインオ及びジョン・ロドリゲスが熱烈な愛の心から祝福の殉教者を励ました。〔殉教者〕の一人一人が主に霊を捧げたその信念は考慮に価するものである。或る者は「主を讃えよ」（ラウダテ・ド・ミヌム・オムニ・ド・ジエズス）を唱えながらその生命を終え、他の者はイエズスが十字架の上で永遠の父にその霊を委ねたときの言葉を述べ、また使徒信条を唱ふる者や、「イエズス・マリア」と云う者もあった。異教徒はこれを見て深く悲しみ役人〔半三郎〕は総ての人々から聖人と考えられている者をこれほど残酷に殺したことに堪えられないで、しななければならない仕事を一緒に居た長崎の役人（フエイクス）に委せて、泣きながらその場から立ち去ったほどである。

他の一人の日本人は聖人たちが喜んでその生命を終えたのを見て、国王及び彼等〔修道士〕の総ての敵の救済を主

に求め彼等を磔にした人々を許し、涙を流し悲しみながら一ポルトガル人を抱いて、「私はキリシタンである。背教し聖人たちを磔にする手伝いをした悪人であるが、前は彼等の保護者であつた」と云つた。キリシタンは信仰を教えられ聖殉教者の死を名誉と考へ、彼等は天国の幸わせを享けに行く幸福な人々であると思ひ、涙を抑えることができないで大きな声をあげ、「イエズス・マリア」と云つた。異教徒の「役人」は彼等が十字架の近くへ行くのを妨げたが、遠くから跪づいて眼の前に見た出来事を主に感謝し聖人たちを敬つた。彼等の死んだ原因を考へて、キリシタンはその信仰の根を深くしたが、或る人々は叫んで「ああ、日本へ来て現世の幸福には貧しかったが、主のための説教によつて得たキリシタンを伴ひ、名誉と栄光を抱いて天国へ上つた幸福な修道士たち」と云つた。他の人々は「このような聖殉教者の血の注がれた日本の国や長崎は幸わせである。彼等は、異教徒が闇から抜け出しキリシタンがその仲介によつて増加するようにこの国に特別な光を与えるに違ひない」といつた。或る人々は「過去の栄光の殉教者について聞いたり読んだりした事を眼の前に見、この聖殉教者の示したような極めて勝れた軍隊を見ることができた自分たちは幸福である」と云つた。彼等は日本（に）にいるポルトガル人の教え方によれば一五九七年二月五日の朝の十時、しかしヨーロッパ（のスペイン人）の教え方では四日に、殉教者の長・イエズスを表わす十字架上でみな一列に並べられ、死の最後まで耐え忍ぶようにイエズスより御恵みを受けて磔になつた。彼等は著名な殉教者・聖アガタ（註・イタリアのパレルモ生まれ。二五年二月五日に殉教した聖女）の日に死を遂げたが、その聖女と同じく、天国に於ける小羊・イエズスとの結婚に招かれたように殉教に向かつて行つた。その殉教に関する最も正しい判断のため、主は国王の宣告が棒の上に高くかかげられた板に書かれるように為し給うた。その棒は木柵の中に立てられたが、これは長く其処に保存されて、それにより「国王がときどき賞讃していた聖福音の教えを説いたから磔になつたのではなく、現世の他の原因で磔になつたのである」といつて国王の意思に汚点を付けようとした人々の不信を説服

するためである。この殉教にとって必要な「国王の」意思をさらに明白にするために、国王・太閤自ら一通の手紙を送ったが、それは後にできる限り忠実に正しく訳されてマドリドへ到着した。その中に於て、福音の教えを説いた事が理由で栄光の殉教者を磔にさせるのが彼の意思であった、と宣言している。これによって不信の人々の混乱した想像が取り除かれたが、その人々は自分たちの不信によって、この栄光の殉教を数多の土地に知らせあらゆるキリシタンの間に著しく有名にする動機となった。何故ならば主は悪から善を引き出すことを知り給うからである。

第二十一章 キリシタンが祝福の殉教者の死に対して示した多くの信心。

キリシタンは棒で殴打された——キリシタンは聖遺物を集めた——キリシタンたる一人の武士の言葉——殉教の場にいた人々——考慮に価すること。

祝福の殉教者の死に於て極めて特殊なことが起こったという事ができるが、それは一人一人の生涯（の記録）に於て述べるためにここには挙げない。注目すべきことはキリシタンたるポルトガル人や日本人が特別な信心を示したことである。彼等は異教徒（の役人）によって棒で殴打されたけれど、聖殉教者が槍で突かれるときに十字架の所まで行って、死ぬ前に天国に於ける彼等のとりなしを求めた。死の後には、準備して行ったハンケチや布（こはく織）に血を受けた。集まったキリシタンは極めて多かつたし、何か聖遺物をもって行こうとする希望が極めて強かつたので「役人が」数多の人々を「殴打して」頭を負傷させ頭部に最も深い傷を負った者の一人を他の者のみせしめのために聖遺外管区長の十字架の足許に縛り付けたけれども、異教徒の「役人の」力を以ってしても人々が聖遺物を取るのを

止めることができなかつた。信心が極めて強かつたので、血や血の落ちた土を取り十字架・聖服或いは聖殉教者の衣服から切り取れるものを取って、それらの聖遺物に深い尊敬を示すのを如何にしてもやめさせることが出来なかつた。聖修道士の繩帶やマントをもつていた異教徒がこれを見て、信心深いキリシタンにそれらの品を非常に高い値で売った。キリシタンの内の或る人々は、「住民の」悉くがキリシタンであるその土地に於て自分等の師・説教者に対するこのような不正義なことが行なわれたのを深く悲しんだ。聖殉教者を見に行つた身分の高い或る日本人キリシタンはこの考えに動かされて帯びていた刀を投げ棄て、「信仰の父や師を守るために彼等と共に磔になつて死ななかつたキリシタンは刀を帯びる資格がない」といつた。しかしもし聖人たちを守つたとしても、キリスト教の栄光という点から考えるならば彼等を死から救うことによる榮譽は、キリシタンの大きな教化と異教徒の混乱を惹き起こして信仰を説明する為にあれほど勇敢に喜んで死んだ事の榮譽には及ばないであろう。異教徒は祝福の諸修道士がキリスト教の真実の師として十字架の上から彼等の説いた教えのため死ぬように弟子たちに勧め「信仰を」堅めさせたことに深く注目した。信仰に熱心でその為を受難することを希望していた長崎のキリシタンの上に為された彼等〔修道士〕の聖なる勧告の効果は見るに価するものであつた。

この栄光の殉教者の勝利と信仰の奇蹟的宣伝の場に船の商品を買いに来ていて全国の日本人異教徒が数多くいた。またその港に船を有する数多の支那人もいたが、それは主が計らい給うたものであつて、彼等が目撃したことゝの宣伝者となり支那の異教徒にそれを語るためである。ポルトガル人もまたこの出来事の証人であつたが、それは日本に於て見たことをマカオや貿易の行なわれている東印度のその他の国々で語るためである。苦しみを受けたスペイン人（その中には数多の国々の生まれの者がいた〔註・A〕）は眼で見た証人として、マニラやヌエバ・エスパニーヤに於て栄光の殉教及びその前後に起こつた数多の奇蹟を語ることができた。よく見るならば、聖人たちが侮辱を受けた

市や町の何れかに於て未信者の間で殉教したのではなく、即ちキリスト教徒の見せしめのため国王が彼等に加えようとした処罰がそれらの地に於て公になるに至らず、「事實は」長崎へ送られて其処で生きておるときには尊敬され死後はその聖遺物や遺体が重んぜられたということは、主の特別な御計らいである。それは東印度及び西印度經由での幸わせな知らせをスペインへもたらすスペイン人の証人が数多くあるためであり、伴りであるとの疑念を生ずることなく眼で見た数多の証人によって語られるためである。こうしてあらゆるキリスト教国に伝えられるであろう。

註 A 原文は *Habia muchos de diversas naciones*. (111)の()内は証人総てについての説明、即ち「証人の中には各人がいた」の意か、或いはスペイン人の説明とすれば「スペインの各植民地生まれの者がいた」の意にもとれる。

第二十二章 これらの栄光の殉教者の生と死の中に日本人は我等の主・イエズスの生と死の生き写しを見た。

主が跣足派修道士を日本へ送り給うた諸原因——イエズスは貧しい場所で生まれ給うた——聖人たちは貧しい場所に宿泊した——マテオ福音書第五章・ルカ福音書第六章——我等の主・イエズスの御業——聖殉教者は反対を心になかなかつた——エルサレムへ入ったこと——足を洗ったこと——畑に於ける祈り——囚われ——イエズスの恥辱——イエズスはピラート(ローマの総督)の面前に連れて行かれた——イエズスは狂人と思われた——イエズスは女たちに話した——二人の殉教者の両親が殉教の場にいた——イエズスは十字架上で詩篇を唱えた——イエズスは槍で突かれ給うた——これらの栄光の殉教者は栄光のイエズスに似ているであろう。

私が見たこと及び日本人キリシタンからたびたび聞いたことから判断すると、この王国の幾つかの地方に信仰がすでに植えられてから四十四年後、聖福音の噂が殆んど国中に拡まったときに、サン・フランシスコ会跣足派修道士が天主の使節としました地上の代理者たる国王の使節として派遣されるように主の御心が定め給うたその理由の一つは、あの新しい信者たちが、救世主についてそれまでに聞いたことや聖洗礼によって受けた信仰を以って信じていたことが実際に行なわれるのを見るためであった。この感歎すべき主の御業を詳細に述べることは主の大きな栄光・名譽であるから、これらの僕たちの生と死が眼に見えることに於ても見えないことに於ても、主の生と死に一致していることをこの章の中に述べようと思う。主は我等を救うためまた謙虚と完徳への道を我等に示すために、自分の死すべき十字架を常に頭の中に画きながらこの世に於て三十三年の間苦しみ給うた。

人間の姿の全能の天主が先ず最初に所有し給うた場所・教会堂・説教壇は貧しい場所であり、そこに貧しく生まれ給うた。その場所は（この御降誕の秀れた御業即ち永遠の精神たる主が肉体として表われ給うたことについて、その憐れみの御心を一層豊かなものとするためその場所を馬小屋と称ばないとしても）それは手入れのしていない小屋であり、それをキリスト教徒の最初の天主堂となし、天からそこへ天使の合唱隊が降りて来て、ただその限らない愛によつて嬰兒になり初声をあげ給うた天主を讃えるのが見られた。諸天使は人間の幸わせによつて受けた喜びを知らせるために、また生まれたばかりの天主の御子の注ぐ涙のために、この嬉しい消息を寝ずに番をしていた牧者たちに知らせに行き、彼等はお互いに、永遠の父の御言葉即ち精神が現世の人間に姿を変え粗末な布に包まれて狭いまぐさ桶に寄りかかり給うこと、そしてその精神（イエズス）がその場所を人々に清貧・謙虚・平靜・遠慮・慈愛及びその他の無数の徳を説くための説教壇となし給うたことの証人になった。

至福の遣外管区長フライ・ペドロ・パウティスタとその伴侶が都の市へ行ったことは、我等の主が日本のキリスト

教及び異教に対して与えようと希望し給うた特別な御恵みであると考えられる。何故ならこのことよってその地に福音の人々が見られるという結果になったからであり、彼等は平和の天使として世界の救い主の貧しくて富める御誕生の消息を伝えるために、また全創造物の主であり諸国王の王、諸領主の主でありながら賤しく生まれ給うたイエズスのその謙虚を人々に知らせるために来たのである。この福音の人々が初めは異教徒の屋敷に於てただ紙の仕切りの中に有するのみの、馬小屋の隣りの貧しい宿舎に宿泊させられたことは「イエズスの御降誕に、似ている所がある。そこに於て彼等の遭遇した困窮は甚だしく、人間として生活するのに必要な大根ネギや菜レタすらも無かった。これは彼等が貧しい天主の教えを説きに行ったのであるから粗末な場所を住居とするように主が計らい給うたものであり、その聖服・装身具及び現世に於ては光り輝く物の貧しさを以ってその貧しさが自ら求めたものであることを（何故なら修道士は異教徒の間で常に名譽ある人々として知られていたからである）異教徒にもよく知られるように主が為し給うたのである。こういう方法により貧しくて狭いまぐさ桶の中から行ないを以って説き、後にはその最初の説教の中で主題とされた嬰兒イエズスの自ら求め給うた貧しさを信じられるようにした。何故ならば最初の説教に於てイエズスの話した言葉は精神の貧しさど天国の幸福とを協調させるということであつた。主はその僕たる修道士が最初に住居とした賤しくて貧しい場所に權威を与えるために、それが天であると思わせるように為し給うた。何故なら聖御降誕の日、聖修道士と共にそのとき朝課及びミサを唱じていた小数のキリシタンによつて天の歌が聞かれたからであり、それはその「歌を」聞いたキリシタン自ら何回も私に語つたところである。

我々の主・イエズスの全生涯を抜粋して見ると、次のことが解るであらう。その一生は悉く祈りに占められ、祈りに徹宵し、苦しめる者・貧しい者の援助、漁夫たちの避難所であり、それらの人々を深い愛情で取り扱い、一般の人々からは交際されない癩患者と話しこれを治療することに嫌惡の情を抱かなかつた。最後にはユダヤ人の禁止や死を

恐れず、人々から投げかけられる侮辱や罵りを強い忍耐心を以つてしのび、砂漠やその途中の寒暑の苦しさに耐えながら福音の教えを公に説いた。であるから貧しくて賤しい跣足派修道士がこの点に於て如何に主に似ていたか、ということは今まで述べて来たことよつて明白である。何故ならば彼等は昼のみに止まらず夜も個々に或いは揃つて声を出し或いは心の中で祈ることに何時間も費し、優しく愛情のこもつた言葉によつて貧困者を援助したのみならず、病院が出来る前には教館や菜園の中に離れた部屋を造つて病人を收容し、眞実の両親の愛情をもつて自分の食物をさいてその有する貧しい物を病人に与えた。「ああ、聖なる主よ。御身は私が眞実を述べていることを知り給う。また恥のため〔俗世の〕人間的名譽のため罪を隠し口を閉ざしていた如何に多くの人々が、この主の僕たちとの交渉によつて地獄の門から逃れその生活を改めたか、を知り給う。」彼等は癩患者の一人一人の中にイエズスを考え当然の恐れを征服して、その瘡物に接吻しその足を洗いこの愛の外面的行為の中に救世主に対して抱く彼等の燃える愛を示しもし彼等が主に仕える資格があるとすならば、この地上の〔癩患者の内に〕主を見出し〔癩患者に為すこと即ち〕主そのものに対して為すことを示した。また彼等はキリシタンであり、富み且つ貧しい全能の主即ち〔天主なるが故に〕富み一方では憐れみの御心によつて貧しい姿となり給うた主の説教者であることを極めて明白にその行動の内に示した。教館と天主堂を建設することを国王が許したときに最初に得た許可によつて出来ることを悉く利用し、眞実の救済と世界の救い主を日本人に証明することを少しも恐れなかつた。少数の友人の威嚇も敵側に立つた人々の威嚇をも心にかげず、修道士・キリスト教の説教者の貧しい衣服を着てその国の街路や町村を臆せず^{〔註A〕}に歩き、初めの間異教徒が彼等に加えた侮辱を忍び、味方でない人々が彼等のキリスト教的の臆せぬ態度を非難し、或いは蔭で或いは面前でいった悪口を甘んじて受けた。そのキリシタンの窮迫状態に於てはこの臆せぬ態度は思慮と学識のある人々によつて良心上極めて必要であり義務であると考えられるであらう。苦行の修道士・説教者としての義務即ち断食・責繩

苦行・不眠或いは暑さにも寒さにも常に粗末なシャツ一枚で生活すること及びその他の修練に欠けることがないように、我等の主・イエズスの生涯について教えたことを行ないよって説くことを示した。

さて天主・我等の救世主の御子の受難の出来事の悉くを要約すると、その使者・真実の弟子の受けたこの殉教の中に〔イエズスの生涯の〕再現されているのが見られ、それは心からの感歎に価するものであろう。それは次のようなわけである。我等の希望たるイエズスはその死の数日前に榮譽をもってユダヤ王国の首都・エルサレムに入った〔同じように〕これらの主の僕たちも日本の首都たる京都に於て大きな榮譽と共に迎えられた。我等の宝・イエズスはその説教のとき常に跣足で歩いてしたが、死の数日前には馬に乗った。〔同じように〕彼の説教者たちもまた日本に在って常に跣足で歩いてしたが、死に赴くためには馬で連れて行かれた。我等の救世主・イエズスは天の父の榮光と人間の幸福のために受ける死の前日・木曜日に弟子と共に晚餐を食し、食物と飲物を彼等に与えて限りない愛の名残りを示した。祝福の遣外管区長は主の榮譽のために死ぬことに決まって牢獄へ連れて行かれる前の木曜日、その機会に天主堂に集まったキリシタンに愛情を示すため、言葉と深い慈愛の内にこれを表わし、ビスコーチ〔註B〕（これは病人の困窮のためには聖人の有する最大の贈物であった）を供応し、教館にあった米の酒（ビビ）を与え、殉教者にならうする強い希望を彼等に示した。我等の生命・イエズスは死の数日前に聖弟子の足を洗ったが、祝福の諸殉教者も囚えられる何カ月前に憐れな〔頼患者の〕足をたびたび洗い、聖遣外管区長は毎週聖木曜日に深い信心を以って（これは我等の聖修道会の習わしであった）その部下の足や福音の教えの弟子である日本人の足さえも洗った。

我等の讚美のまとたるイエズスはその死の少し前に永遠の父に祈ったが、これらの榮光の殉教者も祈っているときに〔役人が〕彼等を描えに來た。彼等はその聖御子の功德によって永遠の父に求めた、「我等の慰めたるイエズスが自ら飲み給うた後に〔イエズスのための〕殉教者や信者たちが引き継ぐように希望し給うた苦しみの聖杯にあずかる

ことから我等を除外し給うことなかれ」と。イエズスは永遠の父への従順によつて義務づけられてはいたが、自ら進んでその身を死に委せ給うた。これらの祝福の殉教者も自らの意思によつて日本へ行った。それは我が修道会則第十二章によるものであり。高位聖職者への従順によつて義務とされてはいたが、彼等の手紙で知り得る如くまた私自身も知っているが、充分に隠れたり逃れたり出来たのにもかかわらず自らの意思によつて捕えられたのである。我等の宝・イエズスは捕えられるときに、武器をもつて捕えに行つた人々によつて手を縛られた。これらの栄光の諸殉教者を捕えに行つたのも武器をもつた人々であつて、彼等の手を強く縛つて牢獄へ連れて行つた。イエズスの味方をおおつていた者がイエズスを売つたのであるが、この至福の殉教者にとつてもユダが欠けることはなかつた。何故ならマニラに於て親切に扱い友人と考へていた原田〔註・原田喜右衛門〕や法眼〔註・長谷川宗仁〕のような日本人が、彼等を訴へた人々であつたからである。イエズスが眞実を答へたために人々はアナースの家に於て彼を毆打した。この栄光の諸殉教者も人間的な恐れを抱かずに聖福音を説いたために人々は彼等を棒で毆打し侮辱した。イエズスには多数の伴りの証拠が挙げられたが、この僕たちもさん訴され多数の伴りの証拠の挙げられたことを私は確實に知っている。イエズスは狂人と思われ嘲笑されたが、これらの僕たちも同様に考へられた。つきつきと行なわれた裁判の間に我等の喜びたるイエズスを嘲笑しながら連れて行つたが、裁判の役人たちは彼を非道に扱つた。これらの栄光の殉教者に対しても非道な扱いをして耳を切り車や馬に乗せて晒物として引き廻しただけでなく、私も知っているし祝福の遣外管区長の手紙によつても解るように、途上に於て——それはすでに述べた如く三十日も続いた——長い道中のつぎつぎの牢獄の中にいたときに異教徒の多数の侮辱を受けた。何故なら人々は彼等が不名誉な死に向かつて行くのを見てこれを嘲笑し、以前に広くいわれていた国王の好遇は作り話であると考えたからである。我等の師・イエズスはピラートスの前に引き出され、彼〔ピラートス〕は彼〔イエズス〕に罪がないので死から助けようと希望し、その妻

も同じことに努めた。これら至福の殉教者も名護屋に於て半三郎ハヤシロウの前に連れて行かれたときに、彼〔半三郎〕は彼自ら述べた如く彼等を聖人であると考えたので彼等を死から救おうと希望した。ピラートスは異教徒の皇帝の怒りを買うことを恐れて我等の愛・イエズスを磔にすることを命じた。何故ならばもし彼を殺さなければローマ人が来て彼等〔ユダヤ人〕から国を奪うであろう、とユダヤ人がいったからである。半三郎も太閤様の怒りを買うまいとして、また彼の兄・奉行〔註・寺沢広高〕の代理者たる地位を奪われないうちに、これらの至福の殉教者を磔にした。「彼等〔修道士〕が日本に在るが、懲しめの為にもしこれを殺さないならばスペイン人が国を奪いに来るであろう」と多数の異教徒がいった。我等の知識たるイエズスは天主の知識〔を有する〕にもかかわらず、エローデス〔註・ユダヤの王〕の家に於て狂人と思われた。栄光の諸殉教者も思慮のない者と考えられた。殊に祝福の遣外管区長は学識深く、その仕事に於て示した如く彼を識っているあらゆる修道士や世間の人々から思慮深い人物とされていたのに、〔思慮がない者といわれた〕。我等の宝・イエズスはバラバース〔註・C〕と称される悪魔の化身より価値なしとされた。聖殉教者たちも仏僧・盜賊或いは墮落した下層の人々より悪いと考えられた。新しい思慮の教えを説いた故を以てイエズスに對して死の宣告が与えられた。これと同じ理由によって、これらの説教者及び信者に對して十字架の死の宣告が与えられた。

エルサレムの娘たちがイエズスを迎えに出て、イエズスがその弱い肩に十字架を負って行ったときに彼女たちは泣いた。イエズスは彼女たちに、「私のために泣かないで罪人のために泣け」といった。これらの至福の殉教者も期待する十字架を心に画いて殆んどすでに生命を捧げたと同じ気持で死に向かつて行ったとき、ポルトガル人やスペイン人が泣きながらこれを迎えに出た。これらの人々に、「自分たちの死は主のためであって極めて価値のあるものであるから悲しみなざるな。しかし正義に反して自分たちを殺すように命じた人々の盲目のために泣かれよ」といった。

受難のための力をつけるように信心深い人々が没業の入った葡萄酒をイエズスに与えたが、イエズスはそれを希望していても飲むとはしなかった。これらの殉教者にも二人の信心深いポルトガル人が葡萄酒と食物をもつて行った。彼等は親切に申し出られた物を喜んでくだけでも食べようとはしないで、自分たちを磔に連れて行く獄卒にこれを与えた。イエズスを磔にするために人々は無慈悲にその衣類を奪ったが、同じ目的のためにこれらの忍耐強い殉教者も非人間的な獄卒によってマントと上衣を奪われた。

我等の救いたるイエズスは、観想者のいうが如く地上に在った十字架にかけられ釘付にされ残酷・無慈悲に高く立てられた。同じように〔日本の役人は〕これら殉教の温和な小羊たちを十字架にかけ鉄の枷で両足・両手・頸をおさえ非人道的に高く立てた。イエズスが磔になったときに多数の弟子や信心深い女たちその他の知人が少し遠くにおいて他の人には信じられないような悲しみや涙と共に出来事を見ていた。これらの聖人たちの信者や長崎の数多の女もまた遠くにおいて涙や苦しみと共に出来事を見ていた。そして祝福の少年アントニーオの父や母及びイエズス会の説教者であり殉教者たる聖三木パウロを養子にした（日本ではよく行なわれることである）養父も〔その場にいた〕。我等の希望たるイエズスは悪人・悪漢の死刑に用いられるカルバリオの丘で二人の盗人の間に於て磔になった。これらの至福の殉教者も悪人たちの〔処刑場の〕近くで、そこには何人かの盗人の残骸が十字架に残っている場所で磔になった。我等の師・イエズスは完全な隣人愛を私たちに示して彼を磔にした人々のために祈りをささげた。この殉教者たちも同じとき、同じ苦しみに際して同じ祈りを捧げた。聖ジェロニモのいう所によれば、我等の宝たるイエズスは十字架上に在った三時間の間に幾つかの詩篇を唱えた。これらの聖殉教者も十字架にかけられてから生命のある間幾つかの祈りや詩篇を唱えた。イエズスはその父の御手に霊を委ねて生を終えた。この殉教者たちも同じ祈りを以つてその生命を終えた。イエズスの死後に奇蹟が起こった。この選ばれた人々の殉教の前後にもすでに述べた如き、また後

にも述べるような不思議な出来事があった。イエズスが死んだとき、人々は後悔しながら戻って云った、「この者は眞実神の子であった。」際にかかり給うた主の模倣をした人々の死後、キリシタンが「この人々は真にその僕であった」と云いながら戻って行き、異教徒は彼等の堅固な心を見て感歎した。また他の罪人たちは見た出来事を悲しみ後悔をして自分たちの罪に泣いた。

イエズスの死後人々が彼の脇腹を開いたとき、血と水が流れ出たが、これは彼の限り無い愛の明白な表われであった。これらの僕たちも生きのまま両脇を槍で突かれ、流れ出た血が示すとおり主の愛に燃えている心臓を槍が貫いた。人々は我等の光・イエズスをユダヤ人の王と称んで名誉の称号を付した。際になった祝福の人々の十字架の前の板に書かれた宣告もまた非常に名誉のあるものであった。イエズスの死後監視が付されたが、この栄光の殉教者にもその死後監視が付けられた。イエズスの体は死後三日の間形が全くくずれなかった。この諸殉教者の「体も」、終わりには寒さや雨・暑さによって当然四肢の落ちたものもあるが、それまで三・四カ月の間は悪臭もなく変形もせず、完全な外形が長い間続いたことは異教徒でさえも稀有のことと考えた。このことやその他のことに於て我等の主・イエズスはこれらの僕を自らに非常によく似たものと為し給うた。それであるから復活のことに於ても、イエズスが彼等に十字架の印を以って名誉を与え、自らの体の名誉と同じ「復活の名誉を」彼等に為し給うことは確実であると考えなければならぬ。彼等が諸聖人の間に於て秀でて、天国に於けるその信仰の堅固・愛・思慮が優れたものとなるために、武器の力を以って五つの枷で十字架につけさせ、その脇腹の傷が太陽より強く輝くように為し給うたのである。

註・A 原文は *dejaron la libertad de andar* であるが、*no dejaron* の誤りであろう。

註・B 現代のスペイン語ではカステラやケーキの類。当時は粗悪な堅パンに類するものであったろう。

註・C イエズスが捕えられたとき、反乱・殺人の罪によって囚えられていたユダヤ人。ピラートスがイエズスとバラバースの何れかの罪を免ずることを人々に問うたとき、人々は後者を選んだ。

第二十三章 これらの至福の殉教者は日本の教会の初穂たる第一殉教者となった。

ローマの元老院は諸神を崇めさせた——キリシタンは恐怖を棄てた——日本の殉教者はマカベオスの殉教者に似ている——一人の婦人が殉教者となった——これらの殉教者の偉大な名譽。

諸使徒（インフレベ）の長・栄光の使徒・聖ペドロが世界のあらゆる市、あらゆる国の中心・ローマに榮譽を与えたのと同じように、日本のメノール会の小さな群（コミヤリョ）の長・フライ・ペドロ・パウティスタが日本の諸国全体の中心・国都である大きな京都市（キョウ）に榮譽を与えたが、それを述べることによってこの章の目的は充分に達せられるであらう。

先ず第一に聖レオン〔註・レオン一世、教皇在位四四〇—四六一年〕が聖ペドロと聖パブロに関する説教（聖レンオの説教の一）の中で述べている所によれば、諸々の理由の中に於て過去の何世紀もの間ローマが著名であつた理由は、数多の誤りの師であり世界の全民族の諸神を崇め、元老院の意見に従つて祭壇や寺院をその諸神に捧げていたからである。天主はこの意見に面と向かつて、我等の主・イエズスをユダヤ人の間に知らしめ給ひ、何人かが（「イエズスは」未だ生きていたが）彼（「イエズス」）のためにローマに於て祭壇をおこすことを欲し給うた。しかしローマの元老院はそれを喜ばなかつた。何故なら寺院や祭壇を設けて崇める神は彼等（「元老院」）の權威によつて神聖なるものと認

められるべきであつたからである。さてそれほどの誤りの師であつたものが聖ペドロの説教によつて眞実の師となつた。これと同じように京都キョウトは日本のあらゆる偶像崇拜や諸宗派の学習所セウシヨであつたのが、至福のフライ・ペドロ・パウティスタがその地で聖福音について爲した説教・行ない・言葉によつて今は眞実の弟子となつたのである。そこで生まれた他の栄光の日本人殉教者も福音の教えを説いてそれ〔都〕を救済の眞実の道ミチの師となし、日本に於ける〔都〕の周辺の異教の諸国を悉く同じように爲す希望を与えたが、それはローマが他の総てのキリスト教国に対する關係と同じである。

第二に聖ペドロはローマにその椅子を置いて教会長及びイエズスの後継者としてローマの異教の改宗に端緒を与えた。同じように勇敢な殉教者フライ・ペドロ・パウティスタはイエズス会のバードレの造つた天主堂が殆んど壊滅していたときに、その修道会の最初の天主堂を都に建てて、信仰と聖修道会の榮譽のために異教徒の救済と眞実の主を識らせることを希望して伴侶及び日本人の弟子たちと共に異教徒の光となり始めた。

第三に、聖ペドロはその爲した英雄的信仰の証聖によつてイエズスより教会の第二の基石と爲されたのみならず（註・マテオ福音書第一六章）囚えられて今でもローマに於て見られる暗い牢獄にいて数多の人々に洗礼を授け、受けた侮辱によつて彼の妻たる教会を美しくし、当時存在していた少数のキリスト教徒〔の信仰〕を堅固にした。これと同じように主が日本教会の基礎として採り挙げ給うた我等の祝福のフライ・ペドロは多数の異教徒を改宗させ彼等を教会の信徒団となし牢獄に囚えられたことによつて教会を美しくし、その牢の中に於て常に信仰のために喜んで苦難を忍んで信仰の証拠を与え、都の牢獄に於ては二人の者に洗礼を授け、恥辱を受けながら死に向かう途上に於ても（すでに述べた如く）他の人々に「洗礼を授け」、その不名譽を以つて日本にいるキシタンに新しい力を与えた。

第四に、聖ペドロが十字架に於ける栄光の殉教を以つてローマに名譽を与えた如く、我等の至福の殉教者フライ・

ペドロ・パウテイスタも都に於て耳の一部を失いその血によつて都の市に名誉を与えたのみならず、彼の通過した大坂や堺・博多・名護屋の諸市及び特に聖ペドロと同じ原因・理由によつて磔になつた長崎に特別な名誉を与えた。

第五、聖ペドロの死（人々の眼には恥辱と思へた）の結果がキリスト教徒の恐怖を取り除いた。それは人々が彼を埋葬したのみならず、殺されるのを恐れずにその聖墓地へ祈りに行つたからである。それと同じ効果を栄光のフライ・ペドロ・パウテイスタ及び他の栄光の殉教者の死がもたらした。何故ならキリシタンは暴虐者・太閤様によつて自分たちの心に惹き起こされた恐怖や臆病の心を棄てたのみならず、彼等〔殉教者〕に対する信心が極めて厚かつたので、生命の危険を恐れずにその遺体を拝み聖遺物を取りに行つたからである。また都に於て彼等が囚えられたとき、多数のキリシタンが信仰の師たる修道士と共に死のうとして自分〔の名を自ら〕申し出たが、「役人は」その信仰と信心を抑えなければならなかつた。

第六、聖ペドロは磔になつて、キリスト教徒の抱く当然の恐怖心、即ち死に対する恐れ、「俗世の」名誉を失うこととの恐れ、或いは異教徒のみならずローマ人の間に於て相互に重んぜられていた財産を失うことに対する恐れを何かの形に於て和らげた。これと同じように、これらの殉教者の勇敢な隊長・フライ・ペドロ・パウテイスタは弱小心の「人々の」臆病を取り除いたばかりでなく、自分と共に二十人の日本人を殉教へ導いたが、その為したことをよく考えれば如何に讃えても讃え過ぎるという理由はない。何故なら、聖グレゴリーオ〔註・グレゴリーオ・ナシアンセーノ、三二一―三三九年〕が讃えているように七人のマカベオ〔註・シリア王安ティオコ・エビフアネスに反抗して殺された兄弟〕は模倣すべき生きた模範がないのに、ただその信仰を破るまいとして主の援助により勇敢に死んだのであるが、これら幸運の日本人もただ救世主・イエズス及び過去に於てカトリックの信仰のため多数の苦しみによつてその生命を終えた著名な諸殉教者に関して信じていることのみ動かされて喜んで死んだのである。それであるから彼

等がただ信仰及び聖フライ・ペドロとその伴侶の示した信仰の堅固な証聖のみに動かされ受難に對してあれほど勇敢であり、異教徒であったときには大きな恥辱と考へていた十字架を榮譽として重んじたことは深く尊敬すべきである。だから彼等を日本の初穂と称するのは道理に合っている。その理由は〔次のとおりである〕。何年か前に、洗礼を受けた四・五人の私人が罪を犯すまいとし、或いは信仰を棄てまいとしてそのために受難し、その人々の内でも大坂市の或る婦人は一異教徒の下婢であつたが、主人の希望に従つて貞操を売ることを欲しなかつたので首を斬られて殉教した。しかしそれらの人々は誰もイエズスのこれらの勇敢な騎士のように聖福音の大きな名譽を以つて公の宣告による受難をしたのではない。彼等〔今回の二十六人〕が言葉のみならず血と十字架の枷と日本の主要な町を公に持ち運ばれた宣告によつて人々に示し死んで証明した信仰の眞実は、この美しい殉教によつて太陽よりも明るく輝いた。これらの出来事は（沈黙していても）数多の人々を改宗させるのに極めて効果のある言葉である。

それであるから彼等を日本の教会の第一殉教者と称ぶことは道理に合っている。述べたことのほかに十字架の死や十字の形をよく考へると確かに特別な名譽がある。何故ならイエズスのように十字架にかけられたことは言葉では表わせない〔名譽〕であるから。天の十字架の形が、スペインのカラバールカの町にある十字架に明白に見られるのと同じように現われた。その〔カラバールカの〕十字架は天から下りたものであつて今日でもその地に見られるのとおり、それは祝福の聖人たちがその生命の終わりに慰め及び贈物として受けたものと殆んど同じ形である。

聖クレメンテのいう所によれば、彼の師・聖ペドロが頭を下にして磔になつたその方法を考へると、イエズスはこの事に於て彼が頭を置いた所に〔聖ペドロの〕足を置くことによつて彼に名譽を与えようと欲し給うたのである。また至福の遣外管区長とその他の殉教者の死んだときの形を考へると、これらの日本の第一殉教者即ちあの新しい教会の初穂が、彼〔聖ペドロ〕の頭を置いた所に足を置き救世主・ユダヤ人の王と称ばれる名譽の称号〔註・十字架の上部

にある INRI) を受けた所に彼等〔今回の殉教者〕の頭を置こうと主が希望したものと思われる。このことよつて秀れた栄光の座と最高の名譽が彼等に与えられる。何故ならよく考えると、イエズスのために受難する者は諸天使よりも或る点に於て恵まれている。それは彼等〔天使〕はその享受している幸福の状態の故に新たな苦しみを受けることができないが、人間はイエズスのためにその苦しみを受け主の御恵みによつてその御心に適うことができるし、またその〔苦しみ〕により天の栄光に於て多くの諸天使より秀れたものとなることが出来るからである。何故ならその功に従つて恵まれた人々に賞が与えられ善行は天に於て祝されるからである。これらの殉教者の善行は特にそれ〔賞が与えられる〕であろう。何故ならば彼等はその愛するイエズスのためにその生命を十字架に於て捧げ、日本の殉教者の初穂となり天に於て諸天使より迎えられ、十字架の名譽を以つてその栄光の勝利を享けている諸殉教者の間の名譽ある座に置かれるのに相応しかつたからである。

註・A ムルシア地方の市。マホメット教徒に囚えられた宣教師がミサを唱ずるに際し、十字架を準備することができなかつた。そのとき天より十字架が現われたという故事がある。

第二十四章 日本の司教とイエズス会の諸バードレが祝福の殉教者の死後直ちに彼等に逢いに行った。

日本の司教は殉教者を尊敬した——キリシタンの信心——遺体を守るために囲いが設けられた——シメオンの再来のように生命を終えた。

栄光の殉教者を槍で突き終つたのはその日の十時であつた。その日司教のいたイエズス会の教館は殉教の行なわ

れた場所から銃アサルトの一射程の距離にあり、司教は他の諸バードレと共に窓際にいたので、多数の群衆や〔殉教者を〕槍で突くのがよく見えたし、キリシタンの叫ぶ悲しみの声を聞くことができた。殉教のときの出来事の知らせが来ると直ちに（司教は）イエズス会の他の諸バードレを伴って祝福の遺体を訪ねて行った。槍で突かれた至福の殉教者からなおも大量の血の流れ出ているのが見える処まで近づいたとき、殉教という方法によって彼等の霊が天に昇り、主の御恵みを享けるのを彼等自らの眼で明白に見ることが確実（であると考えること）によって、当然心に生ずる悲しみを抑えた。こうして司教は彼等を真実の殉教者として尊敬し、彼等のために記念禱を祈り、深い信心を以って天主の御前における彼等（殉教者）によるとりなしを求めた。最初の祝祭日にイエズス会の天主堂で栄光の殉教者を讃えるためにスペイン人やポルトガル人に説教をし、「この殉教がカトリック教会に榮譽を加えた」といった。またその職務として、最初の機会が来たときに、（教皇）聖下とスペイン国王へ送るため出来事についての報告を作製した。彼（司教）と共に行った諸バードレも、彼等「殉教者」が天に在る栄光の殉教者の数に加えられたことが確実であると考えて、これらの聖人に對して同じ信心を示した。

司教の行ったことよってキリシタンの信心の精神はますます増していつて、配置されていた監視人たちが妨げたけれども、彼等「キリシタン」は聖遺体を訪ねるために再び馳せ集まった。彼等は信心のため至福の修道士の聖服や聖日本人の衣服の地上から手の届く裾を悉く取り去り、各人が聖遺物を充分に得ようと努力した。それが甚だしくなつたので、裸になつた遺体を布や蓆で覆い多数の監視人を置くことが必要であつた。この殉教が長崎の近くのキリシタンの諸村に伝わつたので、その村々を司牧しているイエズス会の諸バードレの内の大勢の人々が至福の殉教者の遺体を敬うために来た。集まつたキリシタンの数が非常に多いしその信心は熱烈であつたので、衣類や足に接吻するだけでは満足しないで、聖人たちが「死の前に」踏みその血を流した土を持ち去つた。夜間遺体を持ち去られる恐れも

あつた。しかし国王がもしそれを知つたならば役人ゾクに対して怒るであらうと考えられたし、日本の習慣として遺体が地上に落ちるまでは宣告の命じているとおり十字架上に置くべきであつた。そのため監視人が信者の参集するのを妨げるのみでは充分でないので、役人は十字架の所へ誰も行かれないように木の棒の囲いを作ることを命じた。しかしこの事も死の恐怖も、祝福の遺体を敬うために多数の人々が入るのを制するには充分ではなかつた。ポルトガル人も日本人も彼等「遺体」の前で日々何かを祈らなければキリスト教徒として大きな罪であると考え、「囲いの中に」入ることの出来ないときには遠くから遺体を敬つた。この同じ信心をイエズス会の或るパードレたちももつていた。何故なら出来るときに度々、海の近くにあるその教館から小舟に乗つて聖修道士の足に接吻をしに行つて、その前で或る者は十字架の晩課ベスマを、或る者は他の信心「の祈り」を祈つた。それは彼等自ら私に語つたことである。この殉教と聖殉教者への尊敬に最も熱烈な精神を示したのはパードレ・セバステイアン・ゴンサーレスであつた。彼は殉教者になることを強く希望し、殉教を希望する者として常にその聖い望みを心に抱いて生きていたので、彼については前巻の中に記録を書いた。「彼が殉教を希望していた理由は」何年も前に極めて宗教的なパードレ・フランシスコ・ザビエルとパードレ・コスメ・デ・トーレスが福音の謙虚と清貧による使徒的人物として「日本の」最初の福音の説教者となり、瘴猛な獣の山に入る如くこの遠い国に入って信仰を植え付けただけども、信者の信仰を堅固にするのに必要な殉教者の血が未だその教会に注がれていないのを見たからである。それでその希望が果たされたのを見たときに主に深く感謝し、熱烈な言葉であらゆる人々に至福の殉教者への尊敬を勧め、その遺体をたびたび訪ねることに努めた。そしてシメオン「註・ルカ福音書第二章三五節以下」と同じように彼の希望が果たされると間もなその生涯を終え、第四巻の最後の章に述べた如く、偉大な宗教家・至聖の人物としての評判の内に死んだ。

第二十五章 殉教者の死後に起こった数多の不思議なこと。

異教徒の感歎——鳥が殉教者の遺体を喰わなかった——不思議なこと——奇蹟的なこと——三条の明るい光と一つの白い十字架が現われた——真実の証拠——数多の星が現われた——金曜日^{Friday}に天の光が現われた奇蹟的なこと。

殉教者の霊が救済〔されて天国まで昇ったこと〕は彼等が自ら進んでカトリックの信仰のために死んだことよって推測されるが、この栄光の殉教の後に数多のことが起こったので、それによってキリシタンはこれらの恵まれた殉教者の栄光が一層確實なものと考えるようになった。何故ならば彼等の遺体はその死後も美しくて立派な容貌を保ち、或る者は眼を天に向け或る者は少しの醜さもなく頭を傾けていたので、異教徒でさえも、これらの祝福の殉教者が美しさを保っているのは注目すべきことであると考えた。何故なら日本では毎日磔になるものがあるので彼等はそれまでに数多の磔を見、槍で突かれた後に醜くなるのを見て来たからである。また〔次の現象も〕特別なことと認められた。それは（その時期にも経験された如く）磔になった他の屍は四日後には悪臭を放ち、その場にいる残忍な鳥が屍の眼を喰うのがふつうであるのに、殉教者の遺体は数が多いのにもかかわらず少しも悪臭を発しなかったし、その眼に近づく鳥は一羽もなく、彼等の近くにも鳥は見られなかった。ポルトガル人が殉教の四十四日後にマカオへ出発するのの際して、この事を総て彼地「マカオ」に於て証明できるように聖遺体を訪ねに行った。（支那の司教総代理が法律上の報告に於て述べている如く）その時にもなお容貌が美しさを保っていたことは感歎に価するものである。証人の或る人々は聖遣外管区長の死の二日後に彼の足の拇指を切ったとき、多量の血が流れ出て、長い時間滴って

いたということを確認した。またマニラに於て眼で見た証人によつて必要な方式を以つて作製された他の報告の述べているように、同じく聖遣外管区長が死んで六十二日経つたとき、十字架上に於て彼の体が三回震え、真白になり槍で突かれた脇腹から大量の血が流れ出た。そのことが長崎のキリシタンの耳に入ると、彼等はそこへ行って布や紙をそれ「血」に浸した。しかし更に感歎すべきことは次のとおりである。殉教者が際になったとき、ポルトガル人と共にその「殉教の場へ」行つたジョバンニ・パウティスタと称する一人のイタリア人が聖遣外管区長及び祝福の殉教者フライ・マルティーン、イエズス会の日本人エルマーン・三木パウロ、その他の日本人の血を大量に自分の帽子に採り、それを陶製の容器に入れてそれを保存した。殉教の九カ月後、大支那の司教区の司教総代理の面前、サント・ドミンゴ会の二人のバードレ、イエズス会の一バードレと一エルマーン、私を含めて六人のフランシスコ会士及び一人の医者^のの加わつているその他の諸証人のいる前で、私は血の入つている容器を破つた。その血は（それを採つたジョバンニ・パウティスタがミサ典書に誓つた如く）殉教者のものであつたが、液体のままであり少しも悪臭がなく、それはこれについて作製された証言の述べているとおりである。

多数の人々と共に私もまた金曜日、「殉教の」最初の夜祝福の殉教者のいる方向の空に明るい柱のような三条の大きな光を見た。（類似のことについて常に考えられる判断に従えば）主はこれら「の光」によつて、天が殉教者の栄光の証拠を与え、彼等は死んでも日本の光となるべきであることを予告しようと為し給うたのである。栄光の殉教の前に船サン・フェリーペに乗つていたスペイン人が日本の上空に白い十字架を見た。殉教に際して起こつたことから考えると、それは栄光の殉教者が十字架上で得た栄光の勝利を表わす徴しであつた。この章に述べた出来事が伴りであるという疑いのないことを理解できるように、私は法律上の正式の手続（そのために為された）^{〔註・A〕}によつて述べられた証人の言葉をここに挙げる。それは左のとおりである。「証人は」第六の質問に対して述べた。「それに関して知

ったことは次のとおりである。前述の長崎市に滞在していたときに或る夜即ち三月十四日の金曜日、この証人は司令官と共に宿泊しているアントーニオ・ガルセースの家に行った。空が荒れていたので窓も扉も閉めていた。アントーニオ・ガルセース・デ・ミランダという他の街の住人が、『空にあるものを見に街路へ出なさい』と伝えて来た。この証人や司令官及びその他の人々はその街路に出て、北西の方向即ち諸バードレが十字架にかけられている場所の上空に火の柱のような大きな光があり、その近くに稲妻のような火の大きい一条がその一つの先端を下方にして表われ、もう一つあまり大きくない一条が西方にあるのを見た。この証人は宿舎の窓で長い間そこから見えるその光即ち西方の稲妻を見ていた。その夜は暗く悪天候であったので窓を閉めて室内へ引き上げた。それから朝になって、数多のポルトガル人や日本人がみな火の柱を見たこと及び北方聖母マリーア修道院^{エルミタダ}の上空に、今まで見たことのない種々の色の星が多数見えて、それが四時間ぐらい続いたことを公に話すのを聞いた。非常に正しくて信用ある人物とされているポルトガル人フランシスコ・ロドリゲス・ピントは私〔この証人〕に次のことを語った。彼や妻、家の者が前述の徴しを見、また三本の柱の内一つ、彼には中央のものと思われる一つが現われてから二時間後にイエズス会の教館と天主堂の上に近づいて落ち、天主堂の上で砕けたが、彼の家はイエズス会に近いので自分の家に落ちると思つて床に伏し大声で天主に救いを求めた。そして非常に暗い闇夜が明けると、空は全く晴れ渡つた。柱の下りた処には星のような数多の火花が見えたが、これはその市全体に周知のことであつた。また私〔この証人〕はこの長崎の市に於て大勢の日本人キリシタン——これは町の長老^{カゼン}であつて、日本語をよく識つているスペイン人ベルナルディーノ・デ・アピラの言によれば乙名^{オトナ}〔註・原文は複数でOtonas〕と称するものである。——これらの者がみな諸バードレの碟になつた後の毎金曜日にろうそくのような数多の光の現われるのを見たことを知つた。この光は聖行列の所から出て、諸バードレがその地に行つたとき迎えられた最初の家であるラサロ病院に下り、光はそこからまた聖母マリーア修道院へ

も行ったが、この現象はそれについて少しの疑いもないほど明白に見られ、それらの日本人の間に於て極めてよく識られてゐることである。」この証人やその報告の内容の語るところは悉くこの記録・この章の総ての内容と同じことを述べていて、さらに次のことを加えている。「日本人キリシタンは『十字架にある聖遺外管区長の体は自分たちの眼の前に現われた幻影であつて、彼は死んだのではない。何故なら彼が常に爲して来たように毎金曜日と土曜日にはラサロ病院で衣類を装つてミサを唱じているのが見られたからである』といつていた。そして或る一日には終日十字架から姿を消していた。」その僕にかかる不思議を示し給える主に祝福あれ。

註・A この殉教事件の直後、マニラに於て殉教に関する訊問証言記録が数回に亘つて作製された。昭和三十四年日吉論文集4の二十六聖人殉教史料一一六ページ及びび切支丹論叢のサン・フェリーペ・デ・ヘスース参照。

註・B 原文は *no porque fuese muerto*。不明確であるが本文訳のように解した。

第二十六章 祝福の殉教者の他の伴侶が追放されたこと。

跣足派修道士は全部で十一名であつた——囚えられた修道士の悲しみ——イエズス会の諸バードレが囚えられた修道士を尊敬した——バードレ・フライ・ジェロニモがマカオへ来た。

船サン・フェリーペで日本へ到着した二人の修道士をいれると、サン・フランシスコ会跣足派修道士は十一名であつた。それらの内の六名はすでに述べた如く主の教えのために磔になつた。他の三名、即ち都に於ける栄光の殉教者

の監禁が解つたときに長崎にいた私たち三名は、私たちの住んでいた教館のあつた町の役人である異教徒によって強制的に追放された。「役人は」港にいたポルトガル人の船へ二人を公然と連れて行ったが、それはキリシタンに深い悲しみを与えた。パードレ・フライ・バルトロメ・ルイスは十字架上のイエズスの像を手にし主の愛のために遭遇している苦難に喜びを示して強い力を明らかに表わしてはいたが、キリスト教的な愛の心から「キリシタン」のために涙を流し、この涙にこの祝福の修道士のために流す彼等「キリシタン」の涙が加わつた。船に到着すると証人の眼の前で船長に引き渡され、これを監視し船から出さぬように「命ぜられた」。私は従順オベディエンスの「誓い」及び正当な思慮・必要に動かされて少なからぬ困難の内に逃れて隠れたが、「俗世の」人間としての恐れから私を匿まおうとするキリシタンも異教徒もないのを見て私は二人のポルトガル人の許に身を現わし役人フネタイシヤの手下ミストロによって同様に船へ連れて行かれた。私たち三人は船中で監視を付けられたが、聖殉教者が磔になるとときには海上にいた。

私たちは謙虚な悲しみと聖い羨望の心を以って愛に包まれた歎きを主に訴えた。何故なら私たちも福音の説教に於ては彼等「殉教者」の伴侶であつたのに、その栄光の死に於てはそれ「伴侶」にならなかつたからである。アダムはその罪の罰として天国から追放されたばかりでなく、天国を見ながら苦しむように主はそれ「天国」の見える処に彼を置いてそこに彼を居住させ給うた。それと同じように主は私たちの罪を見給ひ、その正しい審判によって、十字架を階段として真直ぐに天国へ上つて行つた人々の伴侶の教から私たちを除き、七十七日の間甚だしく苦しい状態トの中に私たちを監禁させ給うた。私たちは六人の兄弟がその伴侶と共に公に示した栄光の勝利を眼の前に見、私たちの目撃したことを思い出して常に、彼等の伴侶に加わらなかつた悲しみを新たにしていた。しかし彼等の伴侶になることができなかった悲しみは、この地上に於ては彼等を失つても天国に於ては確実に彼等に逢うだろうという希望によつて和らげられた。私たちは狭くて寒い場所に監禁されているとき、彼等「殉教者」の苦しみの大きかつたことを

思ひ出し、また私たちが十字架に於ては彼等の伴侶になれなかったからには、私たちの遭遇している小さな十字架「苦難」を以て彼等の生命を捧げた信仰を証明するという事によって自分たちの心の慰めた。

またイエズス会のバードレの来訪やポルトガル人の私たちに對する親切によつて私たちは慰められた。エルマーノ・フライ・ファン・ポープレは彼と一緒に来た船の司令官及びその他のスペイン人と共にマニラへ帰るように国王の許可をもつていたけれども、彼もまた同じ役人の手によつて「私たちのいる」船に連れて來られた。こうして修道士が勞苦を味わうように「主が計らい給うたので」一切のことが道理に反して行なわれ、マニラへ行く船があるのに、私たちはマカオの船で大支那へ連れて行かれた。そこで次の航海を待つて八カ月滞在した。しかし主は私たちの追放「スペイン勢力圏内からの」を終わらせるように計らい給うた。バードレ・フライ・ジェロニモ・デ・ジェズースは（すでに述べた如く）聖遣外管区長の命令によつて大坂市に隠れて残り、間もなく彼も殉教するであろうという希望を抱いていた。そして修道士が洗礼を授けたキリシタンにとつては彼の存在が必要であることを知っていたが、修道士を日本から追放しようとするため彼を探し出すことをキリシタンに命じ、キリシタンも彼に施物を敢えて与えようとはしないので、その為甚だしい孤立と饑餓に苦しみ、そのためやまた他の原因によつて彼は長崎へ下つた。そこに於ても彼の到着がわかつたので、新しい勞苦に遭遇し、終には監視が付けられ一軒の貧しい家に囚えられ、最後にマニラへ行く船に乗せられた。しかし主は私たちの追放を終わらせるように希望し給うた。私たちがマニラへ向かつて乗船するのを待つていたとき、計らずも、逆風が「フライ・ジェロニモの乗つていた」船の進路を著しく変え、マカオへ向かつて吹いた。そこ「マカオ」でバードレ・フライ・ジェロニモに逢つたこと及び祝福の殉教者の遺体に関する知らせによつて、私たちは大きな慰めを受け、その地にある我等の聖修道会の修道院で受けた好意及びポルトガル人の私たちに對する施物によつて私たちは主の深い御恵みを受けた。マニラへ歸る

とき、海上で御降誕の祝日を迎えたので大支那の地に上陸した。都合のよい場所を探し天幕を張りできる限り祭壇を飾った。私たちは日本から装飾品の幾つかをもって来ていたので、そこで三つのミサを唱じ私たちの慰めを主に見出すことができた。主の御心によって、私たちはみな一緒にその船でフィリピン・マニラ市の私たちの修道院へ帰った。

註・A 原文は「彼に」であるが、キリシタンを指しているものと解した。

第二十七章 栄光の殉教者の遺体が諸々の地に分けられたこと。

スペイン人が聖遺物を取り始めた——日本へ「派遣された」フィリピンの使節——聖遺物がマカオ、マラカ及びゴアへもって行かれた。

国王がその宣告によって、祝福の殉教者の遺体を十字架にかけたままにしておくことを命じたので、それを執行する役人は如何なる者もそれを取り除くことのないように、(すでに述べた如く)監視や囲いを置いただけでは足れりとしないうで、市の長老に嚴重に命じ、それを守る監視人を置かせ、もし少しでも「遺体が」紛失すれば彼等を殺すという罰を科した。また殉教者は罪なくして殺されたのであるが、彼等「日本人」が「遺物を取ってはならぬという」命令に背いて殺されても彼等「殉教者」と同じように自分たちも殉教者である、と考えるはならないと「命令した」。日本の司教も同じことを命じた。何故なら国王とよく識り合っているパードレ・ジョアン・ロドリゲス(常に

ポルトガル人の通訳であつたので)及び身分の高い他のポルトガル人に贈物をもたせて国王を訪ねさせ、〔国王が命じて〕殺させた六人の修道士の遺体を私たち〔ヨーロッパ人〕の習わしに従つて埋葬する許可を求めさせ、長崎にある五つの天主堂の聖い場所に遺体を(もしできれば日本人「殉教者」をも)権威を具えて埋葬しようと考えていたからである。しかし司教がマカオへ速やかに帰つたことによつて、その意図は実現されなかつた。それでキリシタンの内の或る人々、特にスペイン人は聖遺体が何カ月間も寒氣・雨・凍結に曝されているので、当然消滅するに違いないということを見て、足や手を取り始めた。「それができたのは」監視人がキリシタンであるし、都に於てはすでに殉教のことが忘れられているであらうし、国王も異教徒もこの問題について話さないので、監視は注意深くは見張りをせず、自分たちも多少は聖遺物を取つていたので、他の人々の取るのをそのまま放置していたからである。

〔聖遺体が〕十字架の上にかけられたまま九カ月経つたとき、フィリピンの一使節〔註・ルイス・デ・ナバレーテ・フアヘルド〕が日本へ到着した。彼は国王に祝福の諸修道士の遺体を要求し、命ぜられた使命としての他の諸問題を交渉するために行つたものである。聖遺物をもつて帰ることを国王が彼に許可したので、そのとき未だ長崎にいた船サン・フェリーペのスペイン人はその熱烈な信心に動かされて、至福の修道士及びその他の殉教者の首や遺体の大部分を夜間大胆にも取つてしまつた。また日本人キリシタンもできる限りのものを取り、イエズス会のパードレは(噂によれば)彼等の三人のエルマーノの首を取取することを命じた。それであるから使節が長崎に来たときには、十字架までなくなつていたので取取する聖遺物は殆んどなかつた。(述べた如く)マカオへ到着した船で行つたスペイン人は数多の聖遺物をもつていた。それらの内の或るものは私たちの兄弟たる修道士の努力によつてその地の私たちの修道院に残され、或るものは私たちの会の修道士がマラカとゴアへもつて行つた。マニラへもその他のものが数多くもつて行かれて、修道士の努力によつて私たちの聖フランチェスコ修道院内の聖い場所に深い尊敬と共に

安置された。それらの内、祝福の遣外管区長の骨の一つが我等の国王陛下の許へ、また数多のものがスペインの諸修道院へ送られた。マニラに於て消息の解らなかつたもの「聖遺物」については私の努力によってそれが私の手に入り、それはサラマンカの聖修道院及び他の宗教的土地へ送られる。

註・A 原文は *por la acelerada del obispo de Macan.* であるが訳のように解した。

二十八章 栄光の殉教者の遺物に対して示した総てのキリスト教徒の深い信心。

殉教者が知らされたとき、マニラに於て為されたこと——マカオに於て殉教が如何に祝われたか——祝福のフライ・マルティーンの首は東印度にある——聖人の列聖とは如何なることか——列聖及び聖遺物の信心に関するシルベストゥレ教皇の言葉——奇蹟的なこと——スペイン国王の信心——ペーニャ貌下はこれらの聖殉教者に深い信心を寄せている。

この殉教者は極めて有名でその人数も多くまた聖福音を説いたために磔になったのであるから、この知らせは非常に多数のキリスト教徒の信心の動機となった。それで信仰に弱い者、殆んど信仰をもたなかつた者もそれを聞いて心が柔らぎ我々の時代にも日本に於てかほど多くの殉教者が出て十字架上の勝利に到達し栄光の死を以てて聖信仰を証明したことをあらゆる人々が主に感謝した。その知らせをもって来た目撃した証人の数が非常に多かったので、キリスト教徒の信心は増加していった。マニラ市は祝福の修道士が使節として出帆した「港で」あるから、この著名な殉

教によって最も有名になった。それで「マニラの人々の」受けた喜びは非常に大きかったから、船サン・フェリーペの積んでいた財物の大損害を忘れてこの新しい殉教と殉教した聖修道士の諸々の徳以外のことは話題にせず、私たちが修道士にお祝いの言葉を述べたほどである。何故ならばスペイン国民の新しい栄光、修道会はこの教館と管区の名譽を抱き殉教の栄冠を戴いて、我等の六人の兄弟は天のエルサレムの聖殉教者の教に入ったからである。キリスト教徒に与えられたこの特別な御恵みに感謝するために、修道会の人々も民衆も集まって厳肅な聖行列を行なった。

私は支那のマカオ市にいたが、そこではポルトガル人の示した信心が非常に深かったので、この有名な殉教のため厳肅な祭りを行なうように修道士の心を動かした。彼等「修道士」、特に神学の教師で東印度・ゴア市のサン・フランシスコ会修道院の説教師であり極めて信仰の厚いバードレ・フライ・アントーニオ・デ・ラ・マードレ・デ・デオースはこの「祭りの」仕事を行なう責任を深く感じた。彼は支那の属管区の巡察に來たものである。彼の命令によって聖行列が行なわれ、それにサント・ドミンゴ会、サン・アグスティン会、イエズス会の何名かのバードレ及び全市民が集まり、この栄光の殉教者の名譽のために数多の詩〔註・ヒエログラフィック。絵文字のような形に書かれた詩〕と韻文が作られた。また殉教を「人々に」理解させるために、殉教に関する出来事が悉く何枚もの画布に書かれたが、それらの内の多数のものが選ばれてヌエバ・エスパーニヤ「メキシコ」及びスペインへ送られ、後に私はローマに於てそれを印刷させた。マラカに於ても同じことがこの信心深いバードレの命令によって行なわれ、彼は常にその栄光の兄弟たちの秀れていたことを説いてこれを讚えた。祝福のフライ・マルティーンの首がもつて來られたが、印度から來た一貴族が私に語ったところによると、この祝福の殉教者の功により主は幾多の奇蹟的な表われを示し給うたので、ゴア市に於て極めて厳肅な祭りを行なうように計画された。諸神學者のいうように、聖人たちの厳肅な列聖（それは聖務日課を勤め、彼等のミサを唱じ、全教会によって彼等が明白に聖人として尊敬されるように聖人の名

薄に厳肅に記録されることによって為される)は教皇聖下の命令によって行なわれ、祭壇或いは天主堂の公の場所に置かれるべき聖遺物レリキヤの調査は聖トウリエント公会議〔註・二五四五—六三年〕の定めるところに従って諸司教に委ねられるべきものである。しかし「厳肅な祭りの計画された理由は」主のために生命を捧げたこの人々のために主が奇蹟的な徴しを以ってこの殉教を讃え給うたので、彼等〔この殉教者たち〕の聖遺物は私的に崇められたし、人々は主に感謝しながら聖行列を行なうことが充分にできたからである。

また祝福の殉教者の遺物が置かれると数多の病人が治つたのを見て、信者たちの心に信心が増していった。次のことは証言が記録され、また私も眼で見た多数の証人から聞いたし、人々の間に周知の事実である。十才の少女が母と共に日本から来るときに祝福の殉教者の遺物を頸にかけていた。船から海に落ちて、引き上げられるまで一時間ほど全身を水中に没していたが、主はその一時間その少女が呼吸を必要としないか或いは水中で呼吸をしても窒息しないように為し給うた。その船に乗っていた人々はみなこの奇蹟的なことを、彼女が聖殉教者の遺物をもっていたのでその仲介によって、主がこの御恵みを少女と母に与え賜うたものと考えた。

スペインに於てはこの殉教の知らせが大きな喜びを以って迎えられたので、その殉教に関して起こった委細の一つ一つが信者の心を燃焼させる焰の火花のようであつて、或る人々は恵まれたその聖なる死を羨望し、或る人々はこの珍しい感歎すべき光景の目撃者であるガレオン・サン・フェリーペのスペイン人の幸運を祝つた。こうして宣教師もそうでない人々も遺物を非常に希望していたので、私がセビーリヤに着いたときに、あらゆる人々から私のもつて行った遺物を彼等に与えるように強く求められた。スペイン国王陛下は熱心なカトリックの王として、この栄光の殉教の知らせを聞いたときにいい尽くせぬ喜びを受けた。そして「血に」染まつた布を見て特別な信心を感じ、殉教に關してもたらされた報告を聞くことを希望して国王の名に於てそれを印刷することを許可した。私はこの殉教について

教皇陛下に報告するためローマへ到着したときに知ったのであるが、教皇陛下及び枢機卿は感歎すべきこの勝利に深い精神的喜びを感じていた。教皇陛下は特に深い信心を以つてこの栄光の殉教の報告を読んだが、それはスペイン語からイタリア語に翻訳されローマで印刷された。そこに於てこれらの栄光の殉教者の列聖が熱心に取り扱われ、スペイン国王陛下はその好意ある書簡を教皇陛下及びその使節に書いた。私はこれらの適切な方法及び聖庁控訴院判事たるペーニャ猊下がこれらの栄光の殉教に対して示した希望によつて総てが順調に実現されることを主に期待している。

ペーニャ猊下は彼等の上に輝く主の栄光を受けるため、また極めて近い将来に実現されるであろう聖ディエゴ・セント・ライムンドの列聖に於て愛と信心を示して天の数多の功績や友を得たように、その愛と信心を以つてこれらの聖人の問題の取扱者となることにより、「これらの聖殉教者に関する」希望を示している。

何故ならば主が十字架の仲介及び御恵みと栄光の数多の報酬を以つてこれほどの顕著な勝利によりその天国の友と騎士として選び給ひ、その御子の模倣者になし給うた人々が、世のあらゆる人によつて尊敬されることは当然為されなければならないからである。こうして彼等は地上に於ても天に於ても栄光が与えられることに於てイエズスの模倣者となるであらう。

(つづく)